広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXI 2009. 3. 22

Stefano Donaudy 作曲 Robert Bracco 劇原作
Alberto Donaudy 脚本

SPERDUTI NEL BUIO 第1幕
『闇に紛れて』

（訳）

枝 川 一 也
（本学大学院教育学研究科）

音楽：ステファノ・ドナウディ
三幕劇原作：ロベルト・ブラッコ
歌劇脚本：アルベルト・ドナウディ

＜ 登 場 人 物 ＞

パオリーナ	ソプラノ
ヌンツィオ	テノール
ヴァッレンツァ公爵	バリトン
リヴィア・ブランハルト	メゾソプラノ
貴婦人コスタンツァ	メゾソプラノ
フランツ・カルディッロ	バリトン
エミリア	ソプラノ
ロロッテ	ソプラノ
カッレーゼの声	ソプラノ
ミローネ	バス
グイドルフィ	テノール
夜更し者の一人	テノール

水夫、女たち、カフェー「ヌオーヴォ・エジツィアーノ」の他の客たち
三人の夜更し者、公爵の招待客たち、下男アンドレア、その他の下男たち
数人の旅人、悪党
舞台：ナポリ 20世紀初頭

第一幕

〈「ヌオーヴォ・エジツィアーノ」店内〉
場末のカフェー。店の奥に、入り口となる曇りガラスのドア、かなり高めのカウンター、リキュールの瓶と菓子類の並んだ棚がある。右手には、ピアノが一台置かれた小舞台。壁のすぐ隣には太い角柱が、角には階段がある。左手には、店の裏へと続く小さな戸がある。その向こうには、食器戸棚があり、様々な食器類や火の燈っていない蝋燭2本がある。あちらこちらにテーブルと椅子が置いてある。店内中央の天井から吊るされた看板には「ヌオーヴォ・エジツィアーノ - 店主：フランツ・カルディッロ - 深夜以降、ピアノ演奏によるシンプルな音楽あり - ダンス可」と書かれている。場面は夜である。店内照明は、ガスバーナーのランプ3〜4個によるもの。

夜遅い時間なのに、出て行く客、来店する客、注文する者、女を口説く者、踊る者、粗相をする者など、混乱と騒々しさが絶頂に達している。怪しげな人物や節度を越えるほど陽気な客たち。カウンターでは、エミリアが勿体ぶった媚を売る態度で、客の相手をしている。エミリアを囲む客には、熱心にエミリアを口説く者もいる。フランツ•カルディッロは赤いトルコ帽を被り、店の裏方と店内を行ったり来たりして、客へこれ見よがしの熱心さでサービスをしている。話し相手が見つかる度に、誇大妄想狂よろしく大げさな言葉遣いで話をする。ヌンツィオはピアノに向かって座っており、やる気が無さそうに俗っぽいポルカを弾いている。弾き間違えたりするが、騒々しさに紛れて、何組ものカップルがテーブルの間を適当にすり抜けながら踊っている。そのうちの1組（男同士の2人組）が、ほかの皆よりもしぶとく踊り続ける。

＜幕が上がる＞

【舞台にピアノがある】

踊る女たち　【機嫌悪そうに不意に踊るのをやめて】

ちょっと、伴奏のテンポがおかしいわ！

【サイダーの瓶の栓を開けて、かなり離れたところから、客の一人のグラスに注ぐ】

ちっとも楽しくないわ…

【風変わりな服装に下手くそな化粧。一人ずつ別のテーブルの席にすわって、扇子をせわしく扇いでいる】

まあ、ね！

【再び踊り始める】

フランツ　ラズベリー風味ですよ。とても美味しいですよ！

男性の二人組　【彼らもまた、踊る脚を止めて、文句を言う】

テンポ、テンポをちゃんとしてくれなくちゃ！

フランツ　【遠くから、ピアノを弾く手を止めたヌンツィオに向かって】

聞いてんのかい、まるでへぼサーカスの伴奏みたいじゃないか？

ラララ、ララララ

【リズムに合わせて手を打ち、口ずさみながら、近寄る】

【ヌンツィオはしばらくそれに合わせて弾き、フランツが拍子を取るのを止めた後も、一人で弾き続ける】

【客の一人に向かって】

目が見えないのにピアノなんか弾くもんで…でなきゃ、何か新しい哲学でも…

【後から来た客たちのテーブルを布巾で拭きながら】

あ、お客さま。

今来た客　【飲物を注文する】

コニャック入りポンチを４つ！

数組のカップル　【すでに酔いが回って熱狂的に踊っていたが、ついに足元がおぼつかなくなり、互いに笑い、からかい合う】

回る、回る、世界は回る、くるくる回る。

【笑いながら】

アッハッハッハ

【男性の二人組が、テーブルにぶつかり、グラスなどをひっくりかえす】

がっしゃーん！

フランツ　ああ、みっともない！

【奥から駆けつけ、割れたグラスなどを寄り集める。その間に二人組は、ばつが悪そうに座り、ハンカチで扇ぐ】

数人の女たち　【それぞれ水兵と腕を組んで、店から出ようとする】

そろそろ、行きましょ。

別の女たち　【座ったまま、いかにも不機嫌そうに】

意地悪女とでも、何と言われても構わないわ。

数人の女たち　【何かをほのめかすように】

あたしたちのことは、悪運の強い女とでも呼んで。

【店から出て行く】

後から来た客たち　【席に着き、ステッキでテーブルを叩いて、駆けつけるフランツに飲物を注文する】

ラム酒！ コーヒー！

エミリア　【あちこちから詰め寄る若者たちに、きっぱりと言う】

触らないで！

若者たち　傲慢な女め！

フランツ　【挨拶もせずに立ち去って行く若者たちを見て、エミリアに近寄り、脅すような口調で】

あまり思い上るなよ。

エミリア　【肩をすくめ、カウンターに戻りながら】

放っておいてよ！

フランツ　【周りに寄ってきた客たちに向かって、大げさなジェスチュアをしながら語りかける】

エジプトにいた頃（最初の妻と暮らしていた頃）はな、俺はハイカラなカフェーを経営していたんだ。それはそれは、洒落た店だったさ！ここみたいな、場末のみすぼらしい店とは違ったさ！…うちのカミサンも、こんな、すごく素敵なイヤリングをしてて、俺は…

【大金持ちだったと言いたげな、親指と人差し指を擦るジェスチュア】

だが、こんちくしょう！イギリス野郎が爆撃して、めちゃめちゃにしやがった。それで俺たちは…

【客の一人がグラスをカウンターに打ち、勘定を頼む。フランツが、いつものように、間髪を入れずに駆け寄る】

1リラと50チェンテージモでございます。

【客が勘定を済ませる間に、裸足のパオリーナがテーブルを回って歩く。髪はくしゃくしゃ、汚れてあちこちの裂けた服を着て、黙ったまま物音も立てずに、物乞いの手を差し出す。客の一人が小銭をやる。】

へい、ありがとうございます。

【元のグループ客のところへ戻る】

何たる侮辱よ！皆さま、それでエジプトから逃げてきたわけだ。

その後、カミサンが重病になって、神に誓いまでしたんだぜ。

だって、（ここだけの話だけれど）宗教が何のためにあるかっていうと、

（こんなときこそ）困ったときの神頼みっていうだろ…

客たち　パオリーナが執拗に物乞いの手を差し延べるのに閉口し、文句を言う〉

こんなところでも物乞いに遭うのかよ！

勘弁してくれよ。	何人かの客	【乞食に背を向ける】
あっちに行ってくれ。	他の客たち	【乞食を追い払う】
気の毒だけど。	他の客たち	【ポケットを探ってから】

パオリーナ　【ポケットを探った客たちに取り付きながら】

小銭一枚でもくださいな… 旦那さまたちなら、そのくらい…

眠いのに、寝る場所もない…

ひもじいのに… 眠ってしまえば、空腹も感じないで済むものを…

フランツ　【椅子で脅しながら】

出て行け、おい、出て行かないか！もう二度と来るなって、この前も言ったとこだろうが。

女　【フランツを伺いながら、寄ってくるパオリーナに合図をして】

あんた、名前は何ていうの？

パオリーナ　パオリーナです。

女　【小銭を少し握らせる】

ほら。

フランツ　出て行けったら。出て行かないなら、痛い目に遭わせてやるぞ。わかったな！

【パオリーナは逃げる。客たちも三々五々出て行く。カウンターからエミリアが軽く会釈しながらやや尊大な態度で挨拶する。フランツは喋り続ける。時折、出て行く客に懇切丁寧に挨拶するときだけ、喋るのをやめる。】

こっちこそ…小銭が欲しいくらいさ… （あばよ）。

客たち　【店に残った数人の女たちに】

さあ、最後のダンスでもいかが？

【驚いた風に】

なんだ、もう行ってしまうのかい？

【ひょうきんに訴え、魔よけを祈る身振りをしながら】

神よ、危険から我々をお守りくだされ！

女たち　【立ち上がって話しかけてきた客たちに背を向ける】

もううんざりだわ。

【お世辞を言われて、あだっぽく】

それなら、もう少しいるわ。でも、ダンスは後で…

フランツ　普段だったら乞食のことも、もう少し丁寧に扱うさ。

だが、ここは皆が飲みにやってくる慎ましい店なんだぜ、でフランツ…（ありがとう） フランツ…（はい、お客様）

…で、フランツ・カルディッロは、店主なのに一番貧しいのさ！

【女性客たちが、あわただしく立ち上がり、勢い良くドアを閉めて出て行く】

【鍵盤に向かって座ったままギャロップ（2拍子の舞曲）演奏開始の合図を待つヌンツィオの肩に拳を当てて、声を落として言う】

ほら、こちらへおいで、もう誰もいなくなったから！

ヌンツィオ　そうでもないような感じが…【振り向かず、もっと従順に】

フランツ　何だと、この馬鹿者？

【夜更し者たち4人が、音楽の演奏の再開を待ちながら、疲れた風にテーブルを囲んで座り、うとうとする。ヌンツィオは、ピアノの蓋を閉め、ステージから降り、そのまま立ちすくむ。頭を後ろにそらせ、見開いた目には、何の表情もない。エミリアも、カウンターでまどろむ。フランツは、残った4人の客には頓着せず、ぶつぶつ呟きながら、テーブルを片付け始め、ボトルやグラスを集めて、リキュールや菓子を戸棚にしまう。】

こんな伴奏では駄目だぞ！ この店の名誉にかけて…分かるか？ こんな下手くそな伴奏では駄目だ！ お前に向かって言っているんだぞ、へぼピアニストめ…

ヌンツィオ　歌の伴奏なら、いつだってうまくやってきたのに…

フランツ　何を言ってるんだ！ 脚で歌を歌うような歌手の伴奏なら、どんな楽団だってうまくできるってもんだろう…でもこれはダンスなんだぞ？ 歌の伴奏にこそ、上手なピアニストの腕が必要なんだろうが…

【ここで上着を脱ぎ、椅子を一つずつ逆さまにしてテーブルに掛け、ガスランプの火を消して行く。一つのランプだけ消さずに残す。数人の夜更し客が既にテーブル越しにいびきをかいている。そのテーブルに最後の椅子を逆さまにして掛ける。〉

夜更し者たち　え、どうしたって？【びっくりして立ち上がる】

フランツ　さ、そろそろ掃除を始めるから、お帰りだ。【片付け作業を続けながら】

夜更し者たち　もう音楽はおしまいなのかい？

フランツ　おしまいさ。

夜更し者たち　【唖然として、互いの顔を見ながら】

出て行かなくちゃだめかい？

フランツ　【いらいらした様子で、簡潔に答える】

そうさ。

夜更し者たち　へえ、そうなのかい！で、ピアニストは？【非常に落ち着いて、ゆっくりとコートを着て帽子を被り、パイプに火をつけて、今にも出て行きそうな様子】

フランツ　ここに残るさ。

【フランツは、食器戸棚の上にあった2本の蝋燭のうち1本に火を灯し、それを持って店の裏方へ行く。】

夜更し者の一人　【ヌンツィオに近寄り、黙ったまま見つめる。好奇心から問いかける。楽しげな感じ】

【ヌンツィオは、ゆっくりと頭を横に振って、「ノー」と答える。】

夜更し者たち　天は実に気まぐれで…【出口へ向かいながら、淡々と】

おやすみなさい！【エミリアに向かって挨拶するが、エミリアは眠り込んでしまっていて返事をしない。】

【客たちは店を出て、やや千鳥足で暗闇へと消えるが、彼らの話し声と笑い声が遠くから聞こえる。】

気まぐれに、命を創造し…【独白のように】

アハ！【下品に】

アハハハハハハハ！【せせら笑い】

で、命が生まれた後で…【遠ざかる】

そしてある日、また気まぐれに天がお召しになる【さらに遠くから】

アハ！…【非常に遠くなり、声が聞こえなくなる】

フランツ　【店の裏方から戻る。ほうきと水のいっぱい入ったバケツを持っている。ヌンツィオがまだ舞台の近くに立ちすくんでいるのを見る。バケツを床に下ろし、蝋燭の火を消さずに食器戸棚に載せる。】

眠くないのかい？ 見張りでもしてるのかい？

ヌンツィオ　昨日も言ったけれど、もう冬だから、酒蔵が湿っぽくなって来た。明日病気にでもなったら、お払い箱にされてしまうだろうな…

【床を掃く前に水を撒きながら】

フランツ　だから、どうしたいのさ？ 俺やあの娘と一緒に、上の部屋で寝たいとでも思ってるのかい？【エミリアを指しながら】

お前の寝場所は、あそこしかないのにさ？

ヌンツィオ　少しでもお金があったら、どこか他の場所へ行ってしまうのに。【もっと従順に】

フランツ　金は、誰が払ってやってるんだ？ 不謹慎だぞ、おい！
他人の金で、食って飲んで… 眼が見えないってのはなんて楽な仕事なんだ！

ヌンツィオ　もう親方のお世話になるのはやめますよ。辞めてどこかへ行きますさ。

フランツ　おまえ酔ってるのかい、それとも冗談言ってるのかい？いったいどうしたんだよ？【声を大きくして】

ヌンツィオ　酔ってなんかいませんよ。それに、私が冗談なんか言うわけないでしょう？

フランツ　【歌うような雰囲気で、掃除をやめて、箒の柄に寄りかかる】
どこへ行くんだい？ おい、どこへ？

ヌンツィオ　我は光の見えない運命の子。貧しく、さまよいながら、世界へ出て行きましょう。運命にまかせて、どこへでも行きましょう。神様がお助けくださるかもしれないから、希望を持って…足取りはおぼつかない… でも希望はいっぱい… 皆を… 神様がお助けください！

フランツ　なんて奴だ。聞いてたかい？ 俺たちを侮辱しやがった… 出て行くんだとさ！
【カウンターに拳を食らわせ、はっと目を覚ましたエミリアに対して】

ヌンツィオ　まだ出ていくとは言ってませんよ… 【数歩、歩み出る】.

エミリア　誰がこんな奴をうちに置いたのさ？【カウンターから出てくる】
私がここに来たときには、もうアイツはいたし。私にとっては、親方…【ドアを指差して】

フランツ　だが俺は… そんなことはさせないぞ… （わかっとるな？） そんな酷いことは。哀れな奴には、恵んでやるのさ… （6リラの日当をピアノ弾きに）【エミリアに向かって小声で】
【ヌンツィオに近づき、信頼できる保護者として、うなじを腕で囲む。】
だが、傲慢だけは許せん…

ヌンツィオ　痛い！ 腕に棘でも生えてるんですかい…

フランツ　【肩に腕を下ろして、強く押す】
とにかく、俺につべこべ言っていないで… そろそろ寝たらどうだ！
【押されたヌンツィオは、転びそうになる。しばらく、気が抜けたように立ちすくむ。おぼつかない足取りで、手探りをしながら店の裏方へ歩いて行く。】
【一瞬沈黙する。フランツは床を掃き始める。エミリアは、掃き終わった床に座り、また居眠りしそうな感じ】

パオリーナ　【息を切らせて、入ってくる】
ああ！【息が詰まったような叫び】
あたしのことを捕まえようとしたんだ！ 捕まえて袋叩きにしようとした！【叫ぶ】
警察に追われているの… かくまってちょうだいな…

フランツ　【隠れ場所から追い出す】
ここに悪者をかくまうわけにはいかないぞ。出て行け！
【ミローネが走りながら店に入ってくる。あちこちを目で探り、勘が当たったのか、不意に足を止めたとたんにパオリーナを捕まえる。】

ミローネ　【満足したように猛々しく笑う】
逃げられると思ったら大間違いだぞ。ワッハハハハハハ！ 捕まえたぞ！
奥様、今晩は…【エミリアに向かって挨拶する】

フランツ　へい、巡査長さま。

ミローネ　おう、フランツよ…

パオリーナ　【がたがた震えながら、小さくなってテーブルの後ろに逃げる】
本当に何も知らないってば…

ミローネ　本当かね？【笑いながら頭を落とす】
誰も動くなよ。【入り口のところへ行って、道へ向かって命ずる】
【木製の扉を閉め、パオリーナのところへ戻る。メモを書き留めた紙を引き出しでめくりながら】
しかし、通報によれば、これで間違いないはずだぞ。盗まれた者が言うには、盗賊に遭う前に物乞いの女が近寄って来たそうな。
【あちらこちらを拾い読みしながら】
それから、あの二人が逃げた後で、また同じ乞食が、あの路地で…分かったかい？【フランツに向かって、密告者のそぶり】

フランツ　そういうことですか！【けしからん、といった様子で、両腕を上げて振る】

パオリーナ　で、それが私とどういう関係があるっていうの？

ミローネ　お前なら、ごろつきどもと付き合いがあるだろう。例の乞食女というのはお前のことだし！
だから、聞きたいことがあるんだ…

パオリーナ　私は何も見ていませんよ！ 何も知らないってば！

ミローネ　おい、気をつけろよ！【太くて節だらけの棒を振り上げて】

パオリーナ　叩きたいなら叩いてよ、どうせ…
乞食を叩いて何が欲しいのさ？ いいから叩いてよ。
【ミローネが棒を激しく振り回しながらどなる】

エミリア　ねえ、がんばってないで… 白状なさいよ。

フランツ　【威圧的に、事件に興味がないふりをして】
黙れ、この邪魔者め！ さあ…捕まえておくんなさい！

ミローネ　捕まえるぞ。

フランツ　そうしておくんなさい。【ミローネはパオリーナの手首を掴んで、片手で思いっきり締める】

ミローネ　隠してないで、話せ！ 分かったな？

パオリーナ　そんなにしたら… 痛いじゃないの…

ミローネ　誰のために見張ってたんだ？ 答えろったら。

パオリーナ　お願いよ！

ミローネ　隠し事してないで、話せ！ 答えないつもりか？言えない理由でもあるのか！
【手首を掴んだまま、パオリーナを後ずさりさせ、棒を振りかざして、今にも叩きそうな様子】

パオリーナ　やめて！

ミローネ　あの二人の名前は何ていうんだ？何か白状することがあるだろうが！

パオリーナの声　【柱の後ろに姿を隠す。そこから甲高い叫び声が聞こえてくる】
ああ、ああ【激しく辛そうな叫び声】
ああ！【激しく長い叫び声】

ヌンツィオの声　【店の裏手から】
いったい誰がこんなにわめいてるんだろう？ どうしたんだろう？

フランツ　おまえは寝てろ！ 邪魔者め！【柱の後ろから、最後の叫び声が聞こえる。それまでよりも激しい叫び】

パオリーナの声　ああ、死にそうだわ。今言うから…【叫ぶように言う】

ミローネ　話せ！

パオリーナの声　イニャーツィオ・トゥッチ…

ミローネ　もう１人の名は。

パオリーナの声　…と、バスクアーレ・イカルディ。【乱暴に突き出される。すでに手足が無感覚となり、息を切らせている。両腕を組んでみすぼらしい胸を締める。ミローネは、パオリーナの言葉に従って、いかにも満足そうに二人の悪党の名を手帳に書き留め、もう一度メモ用紙を読む。】

パオリーナ　お水をちょうだい…【サイダーの残りをコップに注ぐ】

エミリア　かわいそうに。この方がいいでしょ。

フランツ　飲め。【コップを差し出す】

パオリーナ　あーあ！【飲みながら】
もう駄目。痛くてたまらない！

ミローネ　おう、喋ることくらいできるだろ？ だったら、早く、俺に白状しろ。
【パオリーナの近くへ戻って】

エミリア　【相変わらず事件に興味がない振りをし続け、合図をしたりエミリアを自分の元へ呼んだりするフランツに向かって】
もううんざりだわ！

フランツ　そうかい！ 俺がこんなに一生懸命働いてるのがわからないのか？

エミリア　私、もう疲れたわ。

ミローネ　【書き留めた二人の名前を見ながら】
この二人組の詐欺師を捕まえようとして追いかけていたんだが、奴らがお前の母親をかくまったんだ。

フランツ　美しきご婦人よ！ で、どうするんだ？••• 鳥かごの止まり木に止まったオウムみたいに、朝から晩までそこにいるのかね！

エミリア　【怒りっぽく】
もう疲れたわ！

バオリーナ　何も言えないわよ。言わないって約束したんだから…

ミローネ　彼女が死んでから、行方がわからなくなってしまった。

フランツ　カイロにいた頃、うちのカミサンはな…

エミリア　またその話をもちだして… いつもの話に決まってるわ…

バオリーナ　キリスト様の前で誓ったのよ。さっき、ふと打ち明けてしまったときに、もう既に深い罪を犯してしまったのだから。

ミローネ　今度はお前をかくまうってわけかい？ …ところで、二人の悪党の居所を言わないならひどい目に遭わせるからな。気をつけろよ！

フランツ　嫉妬してるのかね？ 3人のうちでも一番美人だったぞ、そりゃあ！
それに… お金が…まったく！ 目の見えないやつが起きているのに、それもわからないのかい？
【急いでエミリアの口を塞ぐ】
で、こんなくだらない話をあいつに聞かせやがって？いまいましい奴め！【喉の詰まったような響きの悪い声で】

エミリア　もっといいことがあってよ。隠し子の話。【店の裏方を指しながら】

バオリーナ　昔はあんたに惚れてたけれど… 今はもう好きなんかじゃないわ！言うもんか！… たとえ殺されたって、口は割らないよ…これ以上強く打ってごらん？ 私は死んじまうから…

ミローネ　俺がどんな人間だかわかってるだろうな。あの悪党どもの居場所を白状しなかったら、ひどい目に遭わせるぞ… おい、わかったか！わかってるな。隠していることがあるなら、言わせるぞ！

フランツ　【聞きに行く。前よりは安心したような感じで戻ってきて、小声で言う】
孤児院ででも拾われたんだろう…、な？【普通の口調で】
どこの馬の骨かもわからない！ 畜生め…確かに、いい体をしてるけど…？まあ、そんなことはどうでもいい…【威厳を込めて】

エミリア　何よ！ まったく分別ってものがないなだから、あんたは！客か…ふん！ いやらしい、いやらしい！【フランツを突き放し、憤慨して立ち去る】

ミローネ　ところでフランツ、俺はイカルディを捕まえに行くぞ。こっちには手掛かりがあるんだから、見つけてやるぞ。
だが、この女が早く口を割ればだな、無駄な時間をかけないで済む。今日中に捕まらなかったら、お願いだよ、こいつをここから逃がさないでおいてくれ、夜明けには戻るから…で、お前はその間に白状しとけよ…！【バロリーナに向かって】

フランツ　もちろん、私は正義の味方ですぜ。

ミローネ　【エミリアに挨拶する】
お休み。ご協力ありがとう。【フランツと握手しながら】

フランツ　【儀式ばった態度でミローネを出口まで案内する】
おやまあ、なんとひどい風…【扉を開ける】
【外の様子を見るために出るが、すぐにまた店内に戻る。風の音が聞こえ、稲妻が走るのが見える】
嵐でも来そうな天気だわい。

ミローネ　構わんさ。【出て行く】

フランツ　【傘を取りに行く。傘は階段に立てかけてある。懇切丁寧な執拗さで、傘を差し出す】
傘もささないで行かれるんですか？ この傘をお使いください。

ミローネ　それじゃ、ご厚意に甘えよう。【傘を受け取り、夜の闇に消えて行く】
戸締りはしっかりとな…【遠くから】
【木の扉をしっかりと閉め、鍵をかける。小声でエミリアに向かって、言い訳をするように】

フランツ　あいつらとは仲良くしておくんだぞ、わかったかい？ 何かのときに役に立つかもしれないから。【鍵をポケットにしまう】
さあ、今度はおまえさんだ。【バオリーナに向かって】
まずは施しを。眠いんだったら、横におなり。【舞台の椅子をどける】

バオリーナ　眠くなんかないわ。

フランツ　この恩知らずめ。それじゃ、死ぬまでここでじっとしてろ。
【命令口調で言い、無理やり舞台に座らせる。】
【フランツは最後に残ったガスランプの火を消す。火の点った蝋燭を持って、一人で階段を上がり始めるが、立ち止まって、腕を組んだまま座っているエミリアを待つ。】
さ、もう寝よう。なにをぼけっとしてるんだ？ 早くしろ。

エミリア　【しぶしぶとフランツに従いながら】
喧嘩を売るつもりなら、今宵は、買ってやってもいいわよ。
フランツ　おかしなことを言うんじゃない。早く上がれよ！
エミリア　顔も赤くなってないくせに…
フランツ　これは何でもない。お前の顔の赤みでも貸してもらうかな？
【屋根裏部屋へと消える二人の声がだんだん遠くなって行く。】
エミリア　そのままいつまでもそんなことを言ってるといいわ…でも、そのうち本当にうんざりしたら…
フランツ　何？ 浮気するとでもいうのかい？
エミリア　そうじゃないわ。もう何度も寝取られてるくせに…
【暗闇に沈黙。雨が降り始め、風が不気味な音をたてて吹き荒れる。時折、遠くで雷の音がする。雨は、初めは音もしないほどの小降りだったが、だんだんひどくなり、しまいに - 95 ページの印のところで - 土砂降りとなる。】

【舞台に小さくなって座っていたパオリーナは、すぐに立ち上がる……そして、考えが浮かぶ。ぼろぼろの衣服を探り、マッチを 1 本見つける……マッチに火をつける。あたりを見回し、食器戸棚に蝋燭があるのを見つける。用心深く歩み寄り、蝋燭に火を灯す。それからカウンターに上がり、腕を伸ばして、クッキーを一つ取る。】

【土砂降りの雨は、ここで少しずつ弱まり、 - 101 ページの印のところで - 完全にやむ。】【ヌンツィオが、店の裏方の、戸のところへ現れる。聞き耳を立てて、様子をしばらくうかがってから、数歩前に出る。】
パオリーナ　誰なの、そこにいるのは？【びくっとして、振り返る】
ヌンツィオ　私だよ。目の見えない者だよ。【小声で、安心させるように】
パオリーナ　ピアノ弾き？【暗闇の影をやっとのことで見分けて】
ヌンツィオ　そうさ。【用心深く、カウンターから降りる】
パオリーナ　気をつけてね、誰かが聞いてるかもしれないから。【クッキーを見つめながら】
【ヌンツィオは、歩き馴れた舞台までの道順を歩いて、聞き耳を立てる】
【雨がやむ】
ヌンツィオ　パオリーナ、俺は、何もかも知っているよ。
パオリーナ　【クッキーをかじる】
あら、寝てたんじゃないの？
ヌンツィオ　何を食べてるんだい？
パオリーナ　パンよ。
ヌンツィオ　いや、それは違うな。もっと美味いものを食べているんだろう…
パオリーナ　告げ口しないでね。【懇願するように】
ヌンツィオ　言わないよ。
エミリアの声　【遠く、屋根裏部屋から聞こえてくる声】
このクソじじい！ 私が出て行ったら…あんたは店を畳むんでしょ。
フランツの声　この魔女め。出て行け！ まぬけ女！ 大まぬけ！ 魔女！
パオリーナ　あの人たちが降りてきたらどうするのよ？【当惑したように】
【屋根裏部屋からの声がだんだん小さくなり、やがて、ぼそぼそいう文句しか聞こえなくなる】
ヌンツィオ　【ごく小さな声で、パオリーナを安心させるように】
毎晩こんな喧嘩をしているけど、いつも誰も出て行ったりしないんだよ。
ほら、もう静かになったろう。こっちへおいで。どこにいるの？【パオリーナに向かって】
パオリーナ　ここよ。何なの？【少し近寄る。少々軽蔑したような態度】
ヌンツィオ　何って？ 何もしないさ。 一緒に話でもしようよ。【黙ったまま舞台に座る】
友　達と話をするのが、そんなに怖いのかい？
辛いことは他人には話さなくても、パオリーナ、君の悲しみを打ち明けてくれたら、僕も自分のことを話すよ。
パオリーナ　怖いわけじゃないの。でも、別に話すことがないみたいなの。
ヌンツィオ　悩み事を持つ者同士なら慰めることができるよ。話してくれよ… 悩み事があるのなら。
【舞台のパオリーナの隣に座る。パオリーナは、無関心な態度でずっと黙ったまま。】

君の姿はどんななの、美しいの、醜いの？

パオリーナ　さあ、どうかしら？【肩をすくめて】

ヌンツィオ　あそこに鏡があるから見ておいで。

パオリーナ　醜いわ。【影の中で、はすに鏡を眺める】

ヌンツィオ　本当かい？【にっこり笑って】

パオリーナ　がっかりしたの？

ヌンツィオ　【ヌンツィオもしばらく沈黙する。突然の願望をいとおしむように】

いいや。さあ、今度は君のことを話しておくれ。君が知ってることを…

パオリーナ　【ヌンツィオの近くに立って、純真な感じで】

一羽のちっぽけな雀みたいに、孤独に生きてる私が、何を知っているというの？雀ならば飛べるから、空から世界を見下ろすこともできるでしょうけれど、私には何も見えないし、何も知らない。母のマリア・フィオーレは、今ではあの世の人だし、私の父親は、立派な紳士なのですって。でも、一度も会ったこともないのよ。私たちを置き去りにして行ってしまったの。雀みたいに孤独に生きてる私が、何を知っているというの？

ヌンツィオ　真実は、神様しか知らない。【不意に決心する】

パオリーナ、僕の考えを聞いてくれ。僕と一緒に来ないかい？

パオリーナ　来るって、どこへ？

ヌンツィオ　どこかって？ いろいろとやることがあるんだ…ここではないよ。どこか、遠いところさ。分かるかい？

パオリーナ　いいえ、分からないわ。【理解できぬまま、ヌンツィオを見つめる】

ヌンツィオ　で、一緒に来るかい？

パオリーナ　ええ、一緒に行くわ。

ヌンツィオ、パオリーナ

いやな人たちから遠く離れたところで、さすらいながら暮らそう。日のあるうちは君が手を取って僕の歩みを助け（手を取るわ）… 日が暮れたら、僕が君に歌の歌い方を教えてあげよう（習うわ）…自由の身になって！さすらいながら、幸せに暮らそう… 遠く離れて…

ヌンツィオ　僕も自由になるんだ、皆、神様の創造物さ！

パオリーナ　遠く離れて、さすらいながら幸せに暮らそう…

ヌンツィオ、パオリーナ

厭な人たちから遠く離れて。

ヌンツィオ　自由に、自由になって…

パオリーナ　【ヌンツィオから離れて】

夜が明けたら、あの男が戻ってくる…

ヌンツィオ　うん、その通りだ。今のうちに行ってしまおう。

パオリーナ　でも、戸が開かないわ。

ヌンツィオ　いつか逃げたいと、ずっと心の中で思っていたんだ。

【腹のあたりを探り、鍵を取り出す】

ほら。親方から借りておいた鍵だよ。【鍵をパオリーナに渡す】

ついに、その日が来たのだ、おお神様！

開けられるかい？ そうっとね。【パオリーナは、その間に鍵を穴に差し込む】

パオリーナ　【戸を開けて、少し外を眺める】

なんてひどい土砂降りの雨！

ヌンツィオ　棚の下に帽子があるはずだよ。

パオリーナ　あったわ。【パオリーナがヌンツィオに帽子を渡しに行く間に、一吹きの風が蝋燭の火を消す。店の中に暗闇が広がる。道は真っ暗で、稲妻も光らない】

ああ！ 蝋燭の火が消えてしまったわ。

ヌンツィオ　道に出るまでなら、私が連れてってあげよう。【互いに暗闇の中を探す】

【互いを探し当てる】

パオリーナ　【ヌンツィオに近づき、手を差し伸べる】

ねぇ、ちょっとでもいいから、私のことをかわいがってくれるかしら？

ヌンツィオ　うんとかわいがるよ。だって、君は僕の心の明かりのような存在だから。一緒においで。【ゆっくりとパオリーナの手を取って引く】

パオリーナ　一緒に行ったら、あなたは私にとってどんな存在になるのかしら？ ここに来て…

ヌンツィオ　【戸口からやや離れたところで立ち止まる】

運命もまた盲目だから、僕は君の運命になろう… 【一緒に歩く】

【二人とも店から出る。稲妻が光り、雷の轟音が響く。〉

【夜の闇に紛れる】

本訳稿は、Stefano Donaudy 作曲 “SPERDUTI NEL BUIO：Opera completa per canto e Pianoforte”, G. RICORDI & Co., 1906, pp.1-122（第 1 幕）を全訳したものである。